



TITLE:

京大広報 No. 439

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 439. 京大広報 1992, 439: 459-466

ISSUE DATE:

1992-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209206>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 439

京都大学広報委員会



外国人教員・留学生懇親会 —関連記事本文 461 ページ—

## 目 次

＜大学の動き＞	計 報.....462
名誉博士称号贈呈式.....460	＜紹介＞
外国人教員・留学生懇親会.....461	生体医療工学研究センター.....463
年末年始の火災予防と特別防火演習.....461	日 誌.....464
＜栄誉＞	＜随想＞
医学教育等関係業務功労者の表彰.....461	モスクワ—1992年9月
＜部局の動き＞	名誉教授 中村 陽 二.....465
平成4年度文学部博物館秋季公開展示.....461	＜コラム＞
—公開講座—	知識の翻訳
文学部博物館「古文書セミナーⅤ」.....461	法学部教授 北川善太郎.....466

## &lt;大学の動き&gt;

## 名誉博士称号贈呈式

12月7日(月)午前10時30分から総長室において、各研究科長及び関係者出席のもとに名誉博士称号贈呈式が挙行され、スウェーデン王国ウプサラ大学名誉教授ターゲ リカルド エリクソン氏に京都大学名誉農学博士の称号が贈呈された。

また、贈呈式の当日、京都大学附属図書館 AVホールにおいて同氏の記念講演が行われた。演題は「高等植物における発生の制御—最近のアプローチ—」である。

以下に贈呈の趣意及び同氏の略歴を紹介する。

## (趣意)

スウェーデン王立科学アカデミー会員、ウプサラ大学名誉教授ターゲ リカルド エリクソン氏は、植物組織培養研究の草創期から今日まで、多年にわたり数々の優れた業績を挙げ、現代生物学におけるこの重要な研究分野の進歩に自ら大きく貢献するとともに、国際的な組織培養研究の発展を刺激し、リードし続けてきた。

同氏は、植物組織の培養法の開発に顕著な成果を挙げたが、その上に立って植物細胞の生理的特徴、遺伝的特性の解明にも大きな業績を残した。数多い同氏の業績のうち、特筆すべきものとして、ポリエチレングリコールを用いるプロトプラスト融合法の発見がある。本法は植物のみならず、動物や微生物をも含むあらゆる細胞の融合を可能にしたものであり、細胞融合研究に重要な突破口を開いたものとして、国際的に高い評価を得ている。今日、この細胞融合法は、組換え DNA のプロトプラストへの導入にも用いられ、形質転換植物の作出に広く応用されるなど、その遺伝学、分子生物学、遺伝子工学などの諸分野における、研究上・実用上の意義は極めて大きい。

同氏は、1972年来日の折り初めて本学を訪れ、農学部の組織培養研究グループとの研究交流を開始したが、それ以後10回に及ぶ来日の都度農学部を訪ねて、学術講演会・計論集会・セミナー等を



行い、本学の研究者や大学院学生に大きな影響を与え続けてきた。ことに1988年3月から1年間は、本学農学部客員教授として在任し、植物培養組織による有用2次産物の産生に関する研究の発展に直接寄与したほか、組織培養手法を駆使した植物分子生物学的研究にも多大な成果を挙げた。また、その間農学部の学部・大学院学生に、現在の植物科学の基本的手法である組織培養の意義と重要性を説くなど、学生の教育にも大きい功績を残した。

## (略歴)

Tage Rickard Eriksson (ターゲ リカルド エリクソン)

1926年3月30日生、国籍 スウェーデン王国  
 1957年6月 ウプサラ大学卒業  
 1959年6月 同大学院修士学位取得  
 1967年6月 同大学院博士(植物生理)学位取得  
 1967年 ウプサラ大学講師  
 1970年 ウプサラ大学助教授  
 1972年 カナダ国立植物工学研究所客員研究員  
 1973年 ウプサラ大学準教授  
 1978年 ウプサラ大学教授  
 1988年3月1日～1989年2月28日 京都大学農学部客員教授  
 1992年 ウプサラ大学名誉教授



## 外国人教員・留学生懇親会

平成4年度の外国人教員・留学生懇親会が12月8日(火)午後6時から、都ホテルで開催され、外国人教員、留学生、教職員、招待者等約950人が出席した。

懇親会は最初に、井村総長の挨拶があり、万波学生部長の発声による乾杯で始まった。アトラクションとして、アメリカの外国人教師によるパフォーマンスやバングラデシュ、中国、タイ、フィリピンの留学生による各国の歌や舞踊等が披露され、加えて本学マンドリンオーケストラの演奏があり、盛会のうちに午後8時過ぎ閉会した。

## 年末年始の火災予防と特別防火演習

本学教職員並びに学生諸君には、日頃から火災予防にご協力願っているが、年末年始の火災多発期を控え、一人一人が防火についての認識と理解をなお一層深めるようお願いしたい。また、消防署による本年の立入検査の結果、廊下等避難通路上の障害物撤去、喫煙管理の徹底、ガムテープ等で巻かれている電気配線の改修、高圧ガスボンベの転倒防止措置の改善、失効消火器の更新等種々の事項を指示されている。この機会にそれぞれの場において、これらの是正指示事項に留意し、防火管理の強化及び消防用設備の点検等を実施のうえ、早急に改善されるようお願いする。

本学には、学内の火災事故に備えて、自衛消防団が置かれているが、本部地区自衛消防団による恒例の年末特別防火演習を12月16日(木)午後1時30分より実施する。当日は、附属図書館の協力により図書館4階調査室から出火したものと想定し、通報連絡、初期消火、避難誘導、救出、物品搬出等一連の総合訓練を行い、自衛消防団の消防車による活動のほか、左京消防署からも数台の消防車が出動して、合同の消防訓練等を行う。

なお、病院地区は11月25日(木)に、宇治地区では12月2日(木)にそれぞれ実施された。

(経理部)

## &lt;栄誉&gt;

## 医学教育等関係業務功労者の表彰

徳岡一行技官(医学部附属病院放射線部画像診断部門主任診療放射線技師)は、医学における教育・研究の補助的業務に関し顕著な功労があったことにより、11月16日、文部大臣から平成4年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けた。

## &lt;部局の動き&gt;

## 平成4年度文学部博物館秋季公開展示

文学部博物館では、12月12日(土)で平成4年度文学部博物館秋季公開展示「古文書の魅力」、「日本古代文化の展開と東アジア」を終了した。

同展示期間中(10月12日～12月12日)の入場者数は、一般1,036名、学生377名、職員219名、特別観覧528名の計2,160名であった。

(文学部)

## —公開講座—

## 文学部博物館「古文書セミナーV」

文学部博物館では、平成4年度秋季公開展示の期間にあわせ10月31日から11月28日までの間、4回にわたり土曜日の午後1時30分から4時まで、同講演室において第11回公開講座「古文書セミナーV」を開催した。

今回で5回目になるこの古文書セミナーは一般市民を対象とし、文学部国史学講座の教官が館収蔵の古文書を素材として、その内容が理解できるよう、また活字だけでは味わえない古文書の魅力を紹介していくものであり、64名が受講した。

講義題目、講師は次のとおりであった。

武将の文書(2)	大山 喬 平
中世の古文書	今 岡 典 和
—文学部博物館の古文書から—	
村の文書 町の文書	仁 木 宏
—中世の場合—	
東アジアからみた日本の古文書	吉 川 真 司

(文学部)

## 計 報

## 植 木 邦 和 名 誉 教 授

本学名誉教授 植木邦和先生は、11月19日逝去された。享年68。

先生は、昭和24年京都大学農学部を卒業後、本学農学部助手、同27年から香川大学農学部講師、助教授を経て、同39年再び本学農学部助教授に迎えられ、同45年農学部教授に就任、同63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和46年1月から昭和49年12月まで京都大学農学部附属農場長並びに同附属亜熱帯植物実験所長、昭和58年12月から昭和60年12月まで京都大学評議員を歴任され大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、石川県農業短期大学学長並びに同大学附属農業資源研究所長を務められた。

先生の専門分野は、雑草学であり、日本農業における科学的な雑草対策の必要性に早くから着目し、雑草学の研究と教育の基盤確立に先駆的指導的役割を果たされた。特に「難防除である多年生雑草の生態と制御に関する基礎研究」において、数多くの優れた研究業績を残され、雑草生物学の基礎を築かれた。主な著書に『雑草防除大要（共著）』、『水草の科学（編者）』等がある。

先生は、学界においても日本農薬学会評議員、日本農学会評議員、日本雑草学会会長、日本芝草学会副会長等を歴任され、学界の発展並びに若手研究者の育成に寄与された。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和57年「日本農学賞」、平成4年4月「紫綬褒章」を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（農学部）

## 田 中 俊 一 名 誉 教 授

本学名誉教授 田中俊一先生は、11月27日逝去された。享年88。

先生は、昭和5年京都帝国大学文学部を卒業

後、同大学大学院に進み、関西学院大学予科教授、同大学法文学部専任講師、同大学文学部助教授を経て、昭和25年京都大学助教授（分校勤務）となり、同30年教授（教養部）に昇任、同43年3月停年により退官された。この間、昭和39年4月から同41年3月まで京都大学評議員として大学の管理運営に貢献された。京都大学退官後は、昭和43年から49年まで京都産業大学教授として後進の指導にあたられた。昭和49年6月京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、教養部においてフランス語の教育を担当されるとともに、文学部・文学研究科においてフランス語・フランス文学の研究指導にあたられ、その深い学識と円満高潔な人柄によって後進の敬愛を集められた。先生の専門は19世紀フランス文学（ロマン主義）、とくにその前期現象としてのプレ・ロマンティスムであり、その綿密にして堅実な研究成果はこの時期のフランス文学研究において、指導的役割を果たすものとして高い評価を受けた。

これらの功績により昭和50年4月には勲三等瑞宝章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

## 南 田 てる 子 文 部 事 務 官

文部事務官 南田てる子氏は、11月30日逝去された。享年53。

同氏は、昭和36年4月農林省蚕糸局に就職され、同年12月本学工学部に転任、以後事務官として31年の永きにわたり、工学部の教務関係業務一筋に、多大の貢献をされた。平成3年には京都大学永年勤続者表彰（30年勤続）を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（工学部）

## &lt;紹介&gt;

## 生体医療工学研究センター

高齢化社会の幕開けとともに、医療のなかに占める医用材料や人工臓器の役割はますます重要になってきている。そのために、人工組織や人工臓器に関する基礎研究とその臨床応用に関する総合研究の遂行を目的として平成2年6月に本センターが設立された。本学ではすでに、医用高分子研究センターが設置されていたが、それは文字通り、高分子材料を医療に応用するための研究施設であり、広範囲におよぶ人工組織を研究するためにはさらに多くの専門分野との学際研究が必要であった。そこで、10年時限の医用高分子研究センターのあとをうけて新たに本研究センターが設置されたわけである。

本研究センターは、生体組織の力学と機構を工学的に研究する生体力学研究部門、その情報に基づいて生体に用いる材料を創り出す生体材料学研究部門、及びそれらの研究のもとに設計された人工組織や人工臓器を動物実験によって研究する人工臓器学研究部門、という三大部門から構成されている。さらに、その三つの研究部門の中に下図



に示すように3ないし4つの領域を包含している。

生体材料設計学領域は、生体適合性材料、生体吸収性材料、生体機能性材料、ドラッグデリバリー用材料などを、高分子を中心にして分子設計する。

## 生体医療工学研究センターの構成

## 生体材料学研究部門

生体材料設計学領域  
再建外科材料学領域  
生体材料物性学領域

## 生体工学研究部門

生体力学領域  
生体機構学領域  
基礎生体工学領域

代謝系人工臓器学領域  
生理系人工臓器学領域  
運動器系人工臓器学領域  
医用システム工学領域

## 人工臓器学研究部門



再建外科材料学領域は、高度の機能性と審美性が要求される歯科材料及び顎・顔面補綴材料の開発と臨床応用ならびにそれらの関連技術に関する研究を行う。

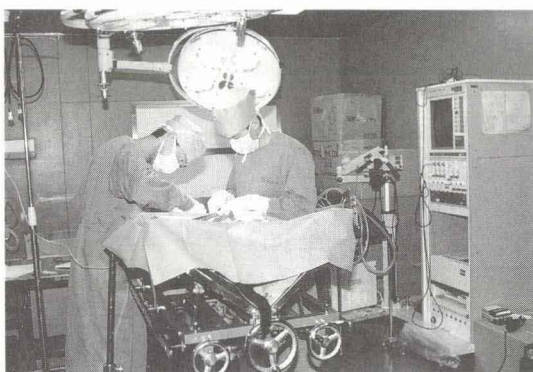
生体材料物性学領域は、人工臓器を設計するための材料の化学的及び物理的性質を調べるとともに、生体内における劣化・安全性・耐久性なども研究する。多くの学問分野と共同的に研究する必要がある、本領域は国内客員としている。

生体力学領域は、血管、軟骨、皮膚などの軟らかい生体組織の力学的性質を研究し、類似人工複合材料を設計する。また、血液、体液及びそのモデル物質の流れを研究する。

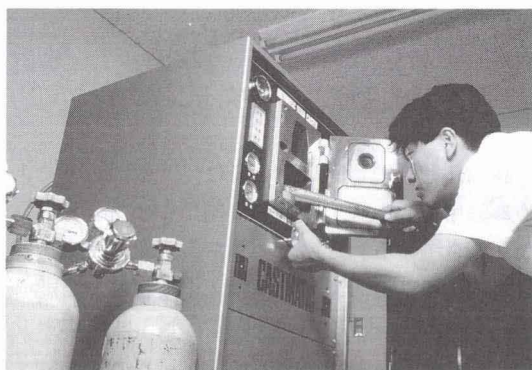
生体機構学領域は、関節など生体内の摩擦部の潤滑機構の解明を行い、インプラント部品の設計法の開発を行う。また、生体組織と人工材料の相互作用も研究する。

基礎生体工学領域（外国人客員）は、人工臓器に関連の深い生体臓器の基本的な機能の解明を行う。物理化学、情報工学、機械工学から、生物、医学にわたる広い領域を含むため、国内のわくを越えて共同研究を目指している。

代謝系人工臓器学領域は、種々の病気や治療に



動物実験のための手術室



歯科用チタン鑄造機

よって、生体の内部環境の恒常性が失われるのを感知し制御するためのアルゴリズムや人工臓器の研究・臨床応用を行う。

生理系人工臓器学領域は、呼吸・循環器系、神経感覚器系などの生理系の疾患に対する再建外科用材料と術式、機能補助法、人工臓器などの開発研究を行う。

運動器系人工臓器学領域は、運動器系の生物学的、生力学的研究にもとづき、人工骨、人工関節軟骨などの開発・研究を行う。

医用システム工学領域は、人体の形態計測や力学解析を基にコンピュータ支援による人工臓器の設計と制御のシステムを作り、患者と人工臓器との間のインターフェースに関する研究を行う。

このように、本センターの研究は、工学と医学の両領域にまたがる上に臨床応用までを目指すため、本学の他部局のみでなく、国の内外の研究者との学术交流も不可欠である。二つの客員部門をもつのはそのためである。これらの共同研究が結実すれば、臓器移植に代わる人工臓器が開発されるのみでなく、高齢者の社会復帰を助ける医用材料やリハビリ用具の開発も可能となる。

（生体医療工学研究センター）

## 日 誌

（1992年11月1日～11月30日）

11月6日 放射性同位元素等管理委員会  
 ♪ 同和問題委員会  
 10日 評議会  
 ♪ 大学院審議会

17日 平成4年度京都大学職員研修主任研修（第2回）（20日まで）  
 18日 国際交流会館委員会  
 24日 評議会  
 ♪ 学位授与式





